

原典講読会

文学研究科 日本史学専修
博士前期課程 1回生 松原一智

○目的

歴史学や社会学といった人文学一般の古典から、問題点とその解決のための論理的思考を理解し、批判的に継承することによって、自身の思惟体系を涵養することを目的としている。

○運営方法

- ・立命館大学衣笠キャンパス平井嘉一郎図書館で計9回開催(10～2月)
- ・参加メンバーが順番にテキストを選定。テキスト熟読→報告・議論→報告書の作成・確認というサイクルを通じ、その都度研究成果と課題を確認した。

○活動内容(一例)

- ・初回(10月5日開催)

初回は、笠信太郎『ものの見方について』を読み、内容要約及びコメント報告後、文化相対論の見地による近世の合理化と近代的なものの確認、西洋と非西洋の二項対立的構図、人文学の思惟「哲学」について議論した。

- ・第4回(11月2日開催)

第4回では、マックス・ウェーバー『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』をテキストとして使用した。この会の議論では、世界的な動向としての資本主義とピューリタニズムの大きさの違いが指摘され、思想と労働の関係の問い直し、禁欲的合理主義の図式の有効性などが議論の俎上に上がった。

- ・第8回(1月25日開催)

第8回では、デヴィット・グレーバー『万物の黎明』を精読し、マクロな「人類史」を立ち上げるテキストの評価、物的証拠による理論への反証の射程、オルタナティブな「歴史」が創る上で何に寄りかかるのか、が話し合われた。

○使用テキスト(一例)

- ・西田幾多郎『善の研究』(岩波文庫、2012年)初出は1911年。
- ・E.H.カー『歴史とは何か 新版』(岩波書店、2022年)初出は1962年。
- ・丸山眞男「歴史意識の古層」『忠誠と反逆』(ちくま学芸文庫、1998年)初出は1972年